

# 祝詞（ノリト）の「ト」とはなにか

——学界の懸案への一試論——

芝

烝

はじめに

本稿は筆者の著書『日本語の起源・系統 その総方向的検証』一祝詞「大祓へ」の場合一（近刊）の序説の一部である。前々から祝詞，とくに「大祓へ」を資料として検証したいと考えていたが，いざ祝詞を扱おうとしてみると，祝詞そのものの意味が神道学界で未確定の懸案とされており，また確かに国語学の内部のみでは解決が困難と思われ，日本列島近隣の言語を探すうち，いちおう見当がついたので，昨2002年12月 日本語語源研究会 に報告し，今年3月『語源研究』41号に掲載された。本稿はその論考にいくらか加筆修正したものである。

祝詞（ノリト）の意味については，宣長ら以来種々論議されてきたが，問題の核心はノリ・トのトが甲類のト（万華仮名の戸・斗）であり，したがって言・事の意味ではないという点である。これはノリト（能理戸）の漢語訳が〔祝詞〕となっていて，〔詞〕の字に惹かれて〔言〕と見がちなことにある。今日までのところ，「要するに，〔ノリトゴト〕の〔ノリ〕については，従来の諸説によってほとんど遺憾なきまでに研究されているが，〔ト〕については，なお今後の研究をまたねばならぬ。」（次田潤『祝詞新講』1922, p.11）と述べられ，また武田祐吉氏も「トについては，諸説があって明解を得ていないが，云々」（『日本古典文学大系』「古事記・祝詞」1944, p.368）とある。

いったい〔ノリト〕が〔祝詞〕という漢語に当てられたのは何時の時点であ

ろうか。いわゆる醍醐帝時の『延喜式』（905～927）の「神祇令」においては、平安朝になって100年以上も経ているのであるから当然であるが、それどころか平城遷都直前の大宝令（文武4年、701年）には明確に見え、これらについては多くの優れた研究があるが、中でも梅田義彦氏の力作『神祇制度史の基礎的研究』に助けられる。「大宝神祇令には、年中諸祭の中に、仲春祈年祭以下を規定し、その後其ノ祈年月次祭ニハ、百官神祇官ニ集ヒ、中臣祝詞ヲ宣リ、忌部幣帛ヲ班ツ」（93頁）とあり、さらに早く、「近江令が制定せられて3年目、即位3年3月壬午の条に、山ノ御井ノ傍ニ諸神ノ座ヲ敷キテ、幣帛ヲ班チ、中臣ノ金ノ連祝詞ヲ宣ル」（88頁）、これは書紀27天智帝の条であり、このように意外と早い時期にまで遡るのである。

さて、たとえば宣長は『大祓詞後釈』中「天津祝詞乃太祝詞事」の条で「ノリトゴト（能理斗碁登）は宣説言（ノリトキゴト）なり」と言っ、トを〔説き〕と解したわけだが、〔説き〕のトは記・紀ともに「登」・「騰」（乙類）*tō* であって、彼自身が2種類区別に着眼した最初の当人であるから、その矛盾に気づいてもよかったのではないかと思われる。

トコフ；トホフ

そこで、これまでの説の中では、小山龍之輔氏がこのトについてトコフ〔呪詛〕のトに言及されたが（『日本文学聯講』）、氏は、例の「天津祝詞ノ太祝詞事ヲ宣レ」の「ノリトゴト」を「ノリ」と「トゴト」に分ち、トゴトは〔ト言ツ〕、そのトはトコフ（〔ト乞フ〕の意とされ）のトと同じもので、強意とされた。しかし、「天津祝詞乃太祝詞事」という文脈で、事（言）をトゴトとするのは無理のように思われる。祝詞は重ねられたもので、事（言）は前・後双方にかかると見るべきであろう。

なお、菟田俊彦氏は、祝詞の読み方の紹介のところで「その他、ノリト〔宣呪〕の義とみる説が行われているが」（『大日本百科事典』小学館、1970、p.353）とあるが、私はむしろこれに注意したい。

さて、わたくしは上の「トコフ」そのものを、ノリ・トの〔ト〕とみてはどうかと考える。つまり「ノリ」と「トコフ」が並置されているとみたい。ま

た、この「トコフ」は「トホフ」とも言う（「神功紀」）ことに注意して、古代日本語の周辺を探ると、固有モンゴル語に \*Toxox がある。小沢重男氏によれば、現代語にも中世モンゴル語にも存在する（『現代モンゴル語辞典』1983, p. 380；『古代日本語と中世モンゴル語』1968, p. 249）。/x/ は喉音であるから、/k/ に近く発音されたり、/h/ に近く発音されたりするから、日本語ではトコフとも、トホフともなっていることがよく理解される。この語の意味は単語家族の関連からも〔鞍を掛ける；鞍に鞍褥をかける；人に罪をかぶせる〕というようであり、また韓鮮語では  $top^b\alpha$  [覆う；罪や責任などを他人に被せる] である。

なお、トコフは『時代別・国語大辞典』上代編では「神に靈威を請うて、自己や他人を詛う」とあるが、ノリはもともと〔告り、宣り、呪い〕であるから、〔ノリ〕と〔ト〕の両者は重なるところがあるから、並置されたとみることは自然なことと思われる。

なお、トコフの音韻上のことであるが、このトは上記の辞書では甲・乙いずれとも明記していないが、記・紀では「止古比」としていて、止ならば乙類ではある。しかし、上述のようにアルタイ諸語として新しく入ってきたものであれば、固有の南島語にとっては、いわば外来語的な音韻は明確には判別できにくかったと考えられる。しかも、toxox とあるように、/o/ であって、/ö/ でないのも、このことに合致していると言いえよう。

#### トフ〔問〕

上記のトコフ；トホフは、時代が降るとあまり多くは用いられないようであったが、実は日本語の中で非常に重要な説彙に先行した同族語であったと考えたい。その語彙とは、実はトフ〔問ふ〕である。トフ（斗敷）〔問い尋ねる；占い問う場合にもいう〕（上記、『時代別』）とある。これは音韻からも、そのトは甲類であり、しかも前記のノリ・トのトと同様に、記・紀では甲類であり、万葉では乙類であるというように全く一致しているのである。上述のモンゴル語の \*tox|ox[tox] 日本上代語 \*tofu への移行が理解されるであろう。

この「問」は、大祓へにおいて「荒ぶる神等をば神問はしに問はしたまひ、

神掃ひに掃ひたまひ」とか「語問ひし磐根樹立，草の片葉をも語止めて」とあるが，神々の前の「問はし」，人々の「問ひ」，草木にいたるまでの「語問ひ」，さらには「天つ罪・国つ罪，許多の罪」に対する自己自らへの「問ひ」，まさに「問ふこと」こそは大祓への精神といふことができる。

さらに言えば，ノリ・トのトは「問ひ」であり，「能理斗碁登は宣り説き言なり」と言った宣長の言華に擬えれば，「告り問ひ言なり」ということになる。祝詞は一方，神々の御稜威を讃仰し，神意の「宣告」を奉じ，時に際し事に当たって「報告」・「祈念」するとともに，他方，神々の「問わし」，人々の，万象の「問い」，自己自らへの「問い」といふことができる。ここにこそ「祓へ」の真の精神が在るのではないであろうか。

付説(1) 日本語トフ〔問〕の同義語タヅヌ〔尋〕について

タヅヌ（多豆妓）〔尋〕の起源・系統はどうであろうか。まず，その意味であるが，万葉集や仏足跡歌など例があるが，〔道を尋ね求める〕とか，道理などを〔推し求める〕などであり，人を訪問するというような用法の「確実な例は上代には見られない」（『時代別』）といわれる。

さて，このようなタヅヌ〔尋〕の系譜は南島諸語に求められるように思う。インドネシア語には *tanja*〔問い；対話，問答〕がある（O. Karow, u. a.）。これはO. デンプヴォルフが *\*təŋən*〔正しくあること〕をあげているのに繋がると考えられる。インドネシア語派のタガログ語では *\*tinjin*，トバ・バタク語 *\*toŋon*，ジャワ語 *teŋen*などをあげ，また *\*təŋah*〔中，半分〕でンガージュ・ダヤク語，またトバ・バタク語 *\*toŋa*，ジャワ語，マレーシア語では *\*təŋah*，ポリネシア系でも *\*toŋa*がある。これらから見ると，日本上代語 *\*tadunu* と，意味の上からも合致し，音韻上も *\*taŋa*〔\*tadunu〕の移行関係は自然なものと考えられる。

付設(2) 乙類のト，とくにヤマト邪馬登（大和）・ヤマタイ邪馬台について  
いわゆる『魏志倭人伝』すなわち『三国志』「魏書」倭人の条には，邪馬台

国の名が記されているが、記紀、万葉などには夜摩苔，耶馬騰，耶馬登，耶摩等などとなっていて、すべて乙類の *tö* である。例の「邪馬台国の所在は九州か近畿か」の問題で、古代日本語の仮名遣いから、大森志郎氏は近畿のヤマト（大和）のトがすべて乙類であるのに、九州のヤマト（山門）のトは甲類ということで、後者への批判をされた（『魏志倭人伝の研究』1955）。また原田大六氏は「上代語のヤマトはヤマタイから変化したのではなからうか」と推理された（『邪馬苔国論争』1969, 378頁）が実はその仮説は正しかったといえることができる。

そこで問題は、何故ヤマタイ *yamatai* であるのか。まず *yamac*[*yamatc*] は古代トルコ語で「山の片側，斜面，スロープのこと」（M・レーセネン，s・184）である。—*tai* はモンゴル語のコミタチフ「共同格，～とともに」である。つまり「山とともに」，「山タイ国」は山とともにある国，すなわち「山国」であり。弥生の初め大陸や朝鮮半島や日本列島に上陸した人たちは、いきなり鼻を突くような山国に驚いてこのようになづけたのであらうと思われる。なお台タイ *tai*→登ト *tö* は自然の移行である。いったい名前は他者によって付けられる。その昔，インダス河畔に列達したアーリアンが *shindhu!* *Shindhu!*（海！ 海！）と狂気したように。それがインド，ヒンドウの地名になった（本田義央博士，インド哲学講義）ごとくである。

付説(3) 上代日本語仮名遣いにおける甲類・乙類の区別はなぜ消失したか

上代日本語においては8母音が存在した。すなわち，イ列音，エ列音，オ列音に甲・乙2種，キヒミケヘメコソトノモヨロ ギビゲベゴゾドの20音節である。原始日本語では、これ以上であったかもしれないが、少なくともこれが認められている。その起源や系統については、南島諸語にもアルタイ諸語にもある。例えば、前者では *\*kui*[*kī*（木），*\*apui*] *pī*（火），*\*mui*[*mī*（実），*pi*+*\*tau*]*\*pitö*（人）など、後者では今日の韓国・朝鮮語に母音が8個であるごとく。

さて、この甲・乙2種の区別は何故消失したのか。筆者は1973年に「ドラヴ

ィダ語と日本語」という論文を公けにして、両言語の親縁関係を学界に提起したが（京都女子大学・人文論叢，次いでマドラス大学・プラマイ学会，第10回国際ドラヴィダ言語学会年次会議報告，1980），ドラヴィダ語族はアルタイ系言語に属するが，すでに b. c. 3,000 年頃西北インドに南下し，かの壮大なインダス文明を建立したが，その最盛期をやや過ぎた頃かのアーリアンが侵入し，闘争を繰り返しながら次第に南部へ，またマレーシアやインドネシアへも移動したが，両民族は血縁的にも文化的にも多くは融合し，今日のインドを形成していて，その人口も今日 1 億 5000 万人以上である。

さてその言語も世界で最も美しいものと称せられているが，サンスクリットもそれによる，例の五十音組織はドラヴィダの創始であって，その 5 母音組織の影響こそが，日本上代語の甲・乙類の区別を解消させたものと考えられる。ドラヴィダ語はアルタイ系言語であるが，数千年前にインドに南下し，先住のムンダー人（南アジアの海岸地帯の現在のモン・クメールやミャンマーなどと同語族）を征服・同化したので，アルタイ語的要素とともに南アジア語的要素で古代日本語への影響も少なくないと考えられる。

以上

### 主な参考文献・資料

#### 祝詞定本・資料

祝詞	武田祐吉校注	日本古典文学全集(1)	岩波書店	1958
祝詞・寿詞	千田 憲編		岩波書店	1940
祝詞新講	次田 潤著		明治書院	1927
大祓詞後釈	大野 晋編	本居宣長全集(7)	筑摩書房	1971
神祇制度史の基礎的研究	梅田義彦著		吉川弘文館	1964
時代別・国語大辞典・上代編	沢瀉久孝編集代表		三省堂	1967
岩波・古語辞典	大野・佐竹・前田共編		岩波書店	1974
漢字語源辞典	藤堂明保著		学灯社	1965

#### 1. 南島諸語関係

アイヌ語辞典	磯部精一著	東京実業社	1981
アイヌ語辞典	萱野 茂著	三省堂	1996

- アイヌ語の起源 村山七郎著 三一書房 1992  
 インドネシア語辞典 末永 晃著 大學書林 1992  
 日本インドネシア語辞典 末水 晃著 大學書林 1991  
 日本・インドネシア語辞典 松浦健二著 京都産業大学 1994  
 比較言語学研究（ミクロネシア） 泉井久之助著 創元者 1949  
 原語による台湾高砂族伝説集 台北帝国大学言語学研究室 1935  
 マライ・ポリネシア諸語比較形態論 崎山 理著 大阪外大 1971  
 M. K. Pukui & H. Elbert; Hawaiian Dictionary, Honolulu 1965  
 O. Karow u. I. Hilgers-Hesse; Indonesisch-Deutsches Wörterbuch, Wiesbaden 1962  
 J. V. Panganiqan; English-Tagalog Dictionary, Tuttle 1969  
 L. Sternberg; The Ainu Problem, Anthropos 24 1929

2. アルタイ諸語関係

- 現代モンゴル語辞典 小沢重男著 大學書林 1983  
 日本語と中世モンゴル語 小沢重男著 大學書林 1968  
 トルコ語辞典 竹内和夫著 大學書林 1987  
 満州口語基礎語彙集 山本謙吾著 東京外大A A研 1969  
 ウイルタ語辞典 池上二良著 北海道大学 1997  
 U. Halva; Die Vorstellungen der Altaischen Völker, Helsinki 1937  
 M. Räsänen; Versuch eines Etymologischen Wörterbuch Der Türksprache, Helsinki 1969  
 В. И. Цинциус; Сравнительный словарь Тунгусо-маньчжурских языков, Наука 1975  
 W. Heissig u. a; Wörterbuch der heutigen Mongolischen Sprache, wien 1941  
 Sch. Zebek; Mongolisch-Deutsches Wörterbuch, leipzig 1961  
 T. Burrow & M. B. Emeneu; A Dravidian Etymologikal Dictionary, Oxford 1960  
 L. Spaulding & C. A. Pillai; English and Tamil Dictionary, New Delhi 1888  
 S. V. Shanmugam; Dravidian Nouns <a comparative Study>, Annamalai Uni. 1971

3. 総合・一般

- 日本語の語源 村山七郎著 弘文堂 1974  
 日本語の研究方法 村山七郎著 弘文堂 1974  
 国語学の限界 村山七郎著 弘文堂 1975

日本語系統の探求	村山七郎著	大修館書店	1978
日本語の起源をめぐる論争	村山七郎著	三一書房	1981
原始日本語と民族文化	村山七郎著 (共著)	三一書房	1979
日本語の起源	大野 晋著	岩波書店	1994
日本語とタミル語	大野 晋著	新潮社	1981
語構成の研究	阪倉篤義著	角川書店	1966
日本語語源学の方法	吉田金彦著	大修館書店	1976
日本語の系統 基本論文集 1	芝 烝編著	和泉書院	1985
古代日本人の意識	芝 烝著	創元社	1985
			以上